



2974

紹巴三甫 同答



天正七年六月下旬に落京家より
三甫五日運送し物産奉納し細川
兵部大將殿方存存候列の是等の所陳
申すまははるるに事是を考ふ所は
國東よりとれり此上奉儀の如志
とて其の標あるるに家か一二月に
あり名お旧儀と敷給ふ月七月十二日



まよふくまふくしつ陽城まよひしつ此清
舎子存存淨教白

秋の風
かこはてるまれば後まよひ書ふ

晴くまふ月もせしむくまふまふ三浦

又月九日候城の天宮寺此院に
和漢ありしふ存存淨教白

秋風と存のまよひの二葉ふ

梧涼云暑強

矢晴弓様月

入心出しくはく見れり

江のるまるとはく見れり

又月八月廿日大鏡寺とて和漢まよひ

嵐山内寺此物まよひかきまよひ

まよひて散白取らありりに

ふの名の嵐まよひ一葉の三浦

霜後感 俱秋

吟伴入竺庵存笠

かり福りを海く庵此季の春

同く命有存奉扶して 鉅巴曼陀

心ある三人はゆらりこよとてせん巴了

と書んて種く慈切不見るを巴云を京

中流ふ二指えたる去田今へくくうてこ

まゝか誘ふとぬ口するをくくしき甫云

いそし名人の上はあはれきじははまき

孔子云 君子のあやまら日月の如

蝕とありまをい一道の君子は蝕と天

下此人許用勸く残しとい次毛束二飛

草本はゆらり名人の上の道らと許

三立ゆらんか西口さる礼すまかと國云

陰て能く所膏うらまを礼いそ云

くんおの方と産くくくくくくくく

持て報答するに巴云何まあるらむをいふ
此事何んか云ふこと南云云々もその教
句連方々も案くおまゐり是れを同傳ん
一と答ふに巴云元日の教句

是は巴云云々云々云々

は公方巴云年此花を仕く年の花を
いふに二百六十日花は休む
冬三月の葉のる花に花を
はかす

心と云ふ也余の三季をいふはまはれを
とらぬははまはれはかすやと云ふ冬
を合今月より年の花盛と云
元日の公方南云まはれ盛と云
花をいふはまはれはかすやと云ふ
花をいふはまはれはかすやと云ふ
三歳の小児七知也能は花を仕か
るはまはれ七日に開く七日を盛と云

一教物一より七日は教果る也也也三
七廿日と花の命とよて尋は

咲しつらとあつらふらふまてかうれは
花のりつとてた白るうらうら

是くもちりるよと清かたつらつた何の
花もあけ又花盛ると題ん

おまことんよ今たそ花のはらうら
笑もあつらふらうらとてあす

同題んて

初らうら我も三十北よりひつて

又とあけつら花の盛ると

是と人の命と云らうら我も昔の敷ら

十と人の盛ると云らうら我も昔の敷ら

と冬三月とほつらむとて余の

三季の盛ると云らうら三季の前秋一

季の盛ると云らうら三季と云て

徳を正月朔日未年此花の二受は
初夜を辛う女とていつらんか是に今う
けまゝに教子と成人と云ふ所なり
指す一受は教子と成人と云ふ所なり
了まうせまゝにいつらんか是に今う
けまゝに教子と成人と云ふ所なり
指す一受は教子と成人と云ふ所なり
了まうせまゝにいつらんか是に今う
けまゝに教子と成人と云ふ所なり
指す一受は教子と成人と云ふ所なり

字方より此風と云ふにらるる廟の語也

け教の字は巴云といふ
何よりんかぬ風と云ふに教の字は義
け五文字の字の音は巴云といふ
仕あての南云是は都に人なる人の
志す教の教の字の音は巴云といふ
知るは都の人此教の字の音は巴云といふ
字の文は巴云といふ字の音は巴云といふ
字の文は巴云といふ字の音は巴云といふ

数々のまゝ人へ娘の娘をうけ付るは
旅中にお書きたり

お書きたりお書きたり

巴谷をいふは頼の娘の娘をうけ付るは

頼の娘の娘の娘をうけ付るは

頼の娘の娘をうけ付るは

頼の娘の娘をうけ付るは

けしといふは頼の娘の娘をうけ付るは

これ数々のまゝ人へ娘の娘をうけ付るは

田舎へいふは頼の娘の娘をうけ付るは

間所にお書きたり

頼の娘の娘をうけ付るは

とらふれやをうけ付るは

久松の娘の娘をうけ付るは

まふの娘の娘をうけ付るは

とらふれやをうけ付るは

れおの浦へ 可成りの雨と

かゝぬや 年のころ 風おの雨

けかゝぬ 雨のころ 雨のころ

と云事 雨のころ 雨のころ

巴谷 荒荒 雨のころ 雨のころ

雨のころ 雨のころ 雨のころ

はあはあ 雨のころ 雨のころ

る代の雨 雨のころ 雨のころ

れか 雨のころ 雨のころ

あゝ 雨のころ 雨のころ

事と 雨のころ 雨のころ

ること 雨のころ 雨のころ

み 雨のころ 雨のころ

の 雨のころ 雨のころ

らん 雨のころ 雨のころ

れ 雨のころ 雨のころ

此の公と知れぬ白紙に書きたる条の
之書といつ六甲説の時言はなむ三六
の二風方二雨の書と後と於風を二あ
らばはまはこれ故の書と雨と
三六の物の遠事と書と書との遠事
一六甲の書説中後乃公と二書と
く思ふ故の遠事と書と雨と雨と
此と書と雨と二書と書と雨と雨と

と二人の天下は好まらる下れ天下より
と書と雨と二書と書と雨と雨と
甫云ふ書と雨と二書と書と雨と雨と

紙也

よびてくはあ種のと七甲二書との下是
いたるらや書と雨と二書と書と雨と雨と
七種ありては二書と雨と二書と雨と雨と
七種ありては二書と雨と二書と雨と雨と

おほらうのしちせからまゝのしるはよいつく
甫云 紙色相まゝのしるはよいつく
絵よりけり花よいつくまゝのしるはよいつく
是又の端として古人の端持し終りて
絵よ書は花よいつく風よいつくまゝのしるはよいつく
世に風神をたぬは風よいつくけりおほらう
そぞの恵と云人天下の海氏清りん
道車道者の人也是はまゝのしるはよいつく

は教のうをまゝのしるはよいつく

絵よ書を花にうと云いしるはよいつく
ふおのしるはよいつく成るん也
甫云 巴核列りしるはよいつく
唐七やその名もあまきまは花
是は何と云ふそらうは国えんしるはよいつく
うし 巴云んを唐七のしるはよいつく牡丹
花よいつくしるはよいつく

これい唐やうのいふれしく梅花
上田よあしと牡丹の花を菊の
とまきと也 南云

唐やうのいふれしく牡丹
牡丹の花は成と云沈子又中沈子
ハいそとまきと也 別と云沈子とまき
牡丹の花は成と云沈子又中沈子
と高のいふれしく牡丹の花を菊の

巴はあしと云ふれしく牡丹の花を菊の
唐やうのいふれしく牡丹の花を菊の
牡丹の花は成と云沈子又中沈子
と高のいふれしく牡丹の花を菊の
牡丹の花は成と云沈子又中沈子
と高のいふれしく牡丹の花を菊の
牡丹の花は成と云沈子又中沈子
と高のいふれしく牡丹の花を菊の

日并拈うれ菊のいそし白はらんから此
れより白化はそり乳のそまよりなほのそ
のそ毒と白化物也さやうししてこそ毒
世間よりけはらん南云 百体ま教を拈
めい人のいさあるさう乳とままふは同れ
上人の言さるまふはお遠いといふさ
白いさうり回れありのさうけい

あまやい浅原の晴乃音拈えん

是よりいさる体のま教をそいさうり教い
あまやい連教は南云いさうりあま
巴云いさうりのいさはさうりくは南云上人の
清いさあまはさあまいさうりいさうりさあ
れらるるも能うんさうり遠いといはは
あまの石はれま田を付りよは浅原は田
れまを晴のいさうりくけとぬぬく付付
あまいさあまよいあまの月はま回といはは

とぞしそなは様并連致よ

嵐を本乃夕々礼のこぞ

今うるあるまかこの春をきて

けいもふ旅このあははるいさし瓦

れちかゆもえぬは鏡人のくりにた

めはしこの夕れく嵐のち果ぬを

付也はまきたく人乃ゆら床をまは

あかひらよやゆりまの波さうの只た

まてきてはへしとるつとまむと

あしよく合点まう也ををふ旅さういさ

想うとまむととと大らり遠はけり

り何とまむととととらりしとむと

月事とふは戸かと同くまむとと

な春云ふけ由法おとらりしとむと

とくは春からぬ南云巴教句了

種まうとらりてりふとむのけり

いふはよむいふはこれ漢の乃女をうけ
アアアアアアアアアアアアアアアア
志れをさくけり物より初らり又一句に
又さくけり一語のいひまくと身は三歳
此小児といふすし向あをく敷や
巴云長是の連歌は第廿三の巻
かほはいふよの夜をまひりこれ
さくけりつらむしむらへるは三浦
阿いふまよふをなると行とまのあはれと

こらへるはこれ歌いあはれをうけり
いそをなると待はると又一句は月のむら
くこらへるは月のむらへるのむらへると
又一句は月のむらへるとこれおとと
さあ事と甫云ねいもおの連歌を
いそをなると待はると又一句は月のむら
を待と云よるあくと付し歌いりて
くれ作よしあはれをなると待よるあくと

ふらあまのいよ麻呂帝らん
麻乃あまのいよふらあまらん
かゝるまのいよ作の麻呂のあまの境し
まのいよ作の麻呂のあまの境し
古人のあまのいよ作の麻呂のあまの境し

月うまのいよ作の麻呂のあまの境し
けり月まのいよ作の麻呂のあまの境し
社まのいよ作の麻呂のあまの境し

作まのいよ作の麻呂のあまの境し
古人のあまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し
あまのいよ作の麻呂のあまの境し

あま

ふ付し是の邦人のまじり解を
いふは業と云ふに能くして
しきと云ふ道理の邦人のまじり
つとめ用ひたるありおのまじり
云てこそはくはるしきと云ふ
あり切實と云てはむきと云ふ
まじりては邦人のまじりたる
にらるるを能くしきと云ふ
と批判を

ゆゑの作者のまじりたる
と古人十行のまじりたる
まじりたるを待と申すては
能くしきと云ふに能くして
字といふに足布ぬゆと云
能くしきと云ふに能くして
能くしきと云ふに能くして
能くしきと云ふに能くして

能くしきと云ふに能くして

音

とつゝあは巴云秋まきくしきくして
あふんとや甫云は二字ち切て秋まき
しきくとして昔此初をあらはるる
白也秋と云ふとの字と形あはは法
西落のこゝそ秋のまよれさしなりを
一不西落のこゝそ乃くいゝる人成七
秋の事と云ふの金と云ふ

あはるるまのあはるる

かゝるのあはるるは巴云は古人の初は
巴云はるるあはるる甫云是は古人の初は
許中を元の物をと云ふして洗の中を
月を洗して葉と云者牛と云あはる
あはるは洗はゆへ許中屏を洗して
あはるる古事と云はるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる

指し風神あるは連奇の智恵
糸別をあらりてあるのをてよきと
こまらふ人知てはま作者のんさ
一ふい遠くは道のいふことかたは
昔まいしてくしあてのまのこみま
まへう結ははまのふまのいふこと
茶とま家物と二まの三まのらら
来ゆる家縁まをゆるは何とてわ

くまじりつゝいふふから下のまや
葉の昔より七持り摘む其か
のまのいふいふ見ゆいふまは摘む
ゆま名も知ぬまのつゝ今何の
用あら奇な

口らふ川をいふまて二人は女の
いふことしきる是を七持
ま七持りま二摘むいふまを

よしつゝはくは竹の葉よや紙巴(か)を
那(な)津(つ)の水(みづ)乃(の)草(くさ)を(を)角(かく)心(こころ)
乃(の)厚(あ)ぬ(ぬ)物(もの)や(や)履(履)は(は)く(く)ん(ん)巴(か)
是(こゝ)お(お)句(く)の(の)ら(ら)と(と)て(て)古(こ)く(く)の(の)横(横)持(持)は(は)紙(紙)
は(は)お(お)ぬ(ぬ)物(もの)を(を)と(と)ま(ま)れ(れ)さ(さ)ら(ら)に(に)ま(ま)り(り)は(は)
奇(き)こ(こ)句(く)は(は)草(くさ)れ(れ)は(は)の(の)く(く)心(こころ)は(は)連(連)系(けい)
い(い)お(お)句(く)の(の)草(くさ)は(は)は(は)あ(あ)く(く)と(と)付(つ)く(く)物(もの)を(を)何(なに)
と(と)して(して)履(履)の(の)は(は)ら(ら)に(に)付(つ)く(く)ん(ん)や(や)履(履)は(は)物(もの)を(を)合(あ)は

物の中(ちゆう)從(じゆう)ふ(ふ)物(もの)を(を)紙(紙)系(けい)と(と)して(して)ま(ま)の(の)形(かたち)の
物(もの)か(か)も(も)ま(ま)り(り)れ(れ)物(もの)は(は)紙(紙)巴(か)に(に)連(連)系(けい)
か(か)こ(こ)の(の)足(あし)と(と)ら(ら)れ(れ)神(かみ)を(を)う(う)る(る)ぬ(ぬ)ら(ら)
は(は)ら(ら)は(は)ら(ら)か(か)雲(くも)井(い)の(の)底(ぞこ)の(の)只(ただ)持(持)也(や)
け(け)う(う)大(だい)ま(ま)な(な)い(い)う(う)の(の)足(あし)紙(紙)の(の)底(ぞこ)の(の)う(う)る(る)た
み(み)ら(ら)れ(れ)神(かみ)を(を)う(う)る(る)ぬ(ぬ)ら(ら)と(と)ま(ま)り(り)ぬ(ぬ)ら(ら)の(の)
と(と)して(して)况(けい)紙(紙)巴(か)者(もの)と(と)は(は)く(く)み(み)ら(ら)の(の)神(かみ)を(を)
わ(わ)ら(ら)ぬ(ぬ)る(る)表(あ)巻(ま)借(か)へ(へ)る(る)の(の)形(かたち)を(を)な(な)ま(ま)り(り)ぬ(ぬ)ら(ら)

とばかりいさふれ十徳ももれり
知ぬま可第廿六目よ二並ぬらう
あふ人さふ

あまいあけあふらこむら
と清り也又結巴ま可し

とこしらへの井もれむ水

あふらて浪はるたのふあて巴

是は何のたふらた水のもよあふらと

あふらまこれたまういぬのたふらま

あふら敷くまらのたふらまよあふら

浪よあふらまのたふらま也ま可し

木の葉かたて若みらふ利

あふらまのたふらまのたふらま

あふらまのたふらまのたふらま

あふらまのたふらまのたふらま

あふらまのたふらまのたふらま

思ふ事あれあつていさる此れ好くさるる
はらひしとありあつていつてさ
ふとさよふ事もれらるる書成り
はうま紙の判は巻乃らさうり書なり
はもたつたおつふなり一年と書たを
ぬとて去へ付も付たしふのれと巻
の限りまてこの紙とさう折る巻のせ
さいしつらあつて付りつる

若うとうた公の限るさ——ま
はうま紙の判は漢意へ公の限ると
くさいぬとつらめとて是は月白あり
巴云まの紙の理也——甫云ま紙
の法と也——とて紙のまを教とて
るま公教はらつてさうり倫と
入る公法とさうりはるる道と
俗法終り奇道とさうりあり

紙のよき... 其の形は
るるし

枕もあり又移の座のころを

々として様々座をとりてまゝに

是又福公より記されりるる宿とる

と云ふ其のころ物も束はるる物あり

今日も様々宿とるりたり又なる

きぬるしちりともありぬ又移は付たり

と書くとたは座をとりてまゝに

まゝに今日見るとも物も束の

書るる古き

行書と其の正法と云ふは

花やこころのありま

是は名もつけたりとたはまゝに

とらんやあるをたらしむるは

目いなるは

+

くねらるる縁をせまきしうをいふはまの也
いふ山名の人いふ大とて二回三回とせ
て此れはよく行おし詩中へ傳半回をま
るしとて二回のをまよまらるる我半回をま
とらるる也昔に二三とせしをいふはまの也
さうらゐるよさうらゐるいせんともなはま
ゆんともいふ山名をいふはまの也一後を
古事の中説まはるる也 結色幾列

山田うらな敷り

おんたれしとてはうらな敷りうらな
山田うらな敷りは是れはうらな敷りといふ
色しね中のうらな敷りといふはうらな敷りといふ
はうらな敷りといふはうらな敷りといふは
れはうらな敷りといふはうらな敷りといふは
とじしうらな敷りといふはうらな敷りといふは
何んともなくおんたれのうらな敷りといふは

山

多しと云くは只那平年と云ふは
神の旨ありとてましく笑ひし
はあつとともあく連致と云ふ
まよ易をと云くはとらくは
おとりのひくともひくは
おとりの批判は是れを
まよ月若れ下と云ふは
けういふはまよひはくは

と云ふはまよひはくは
はる物と云ふは昔の
まよはまよひはくは
月の終りと昔の理も
まよはまよひはくは
れあひまよひはくは
也を教ふ

おとりのひくともひくは

十
偽きふくそは道終りの尺さよふ事と
作らんやまらうと曰典卯典と云ふ事
さあさうと又きいふ二竹息の方へ送
し終る方へし神云くけは息親よさ存を
正さふと云ふ事と云ふ事と云ふ事
能く存の事おんと下る事家物と云
下る事と云ふ事し神よそ子知候し沈と
深く歎けりといふ事と云ふ事と云ふ事

さき礼の家方しとてこそ連歎いふ事
一字たふしと云ふ礼一毛たふしと云ふ道
とあり事し所と云ふ事と云ふ事と云ふ事
悪の二つと云ふ礼法しと云ふ事と云ふ事
仏果と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
悪と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
存と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
神と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

道神宮のついでに邪流と邪りの人の
物と交りく糾と格と古今に伝し傳り
はまき道と無子のついでに昔のよみさら
ついでに也内典ありて昔友の親述と書
一とすりと院流くつりお典ありて子初去
仙牙初^カ預と云つり奇道よて風雨よ
付くお奇これ友と悪患とを去はんの
能くともいふことと云ふの之死しまたあり

らふと邪流は今かかるとあるはらり
及と思てぬ人かかると又正流と行ふ
とぬさかい道よをさる能くし言ふ
又るは給也い言紙言佛の連流とを
まよある百人の白とあるはらりい我
連流乃邪流は入りかぬくも成り
しり人の別をよ邪流とらりへて我命の
吾もいふはらりあることなしとす

そはたちとととつらむらうへ
かへつたつとととつらむらうへ
人の心とととつらむらうへ
去つてはつらむらうへ
及他つたつとととつらむらうへ
ふ人をつらむらうへ
うはつたつとととつらむらうへ
つたつとととつらむらうへ

くめつとととつらむらうへ
あつとととつらむらうへ
是つとととつらむらうへ

結巴
三

三甫



Red square seal impression at the bottom left of the right page.

Small handwritten mark at the top left of the right page.

Small handwritten mark in the upper middle of the right page.

Small handwritten mark on the right side of the right page.

Small handwritten mark in the lower middle of the right page.

